

ブラック・ブレット～
天童民間警備会社の新
入社員～

梨味

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

2031年、人類はガストレアウイルスにより、衰退の一途を辿っていた。そんな中、小さな民間警備会社、通称民警。天童民間警備会社に、また1人、社員が増えようとしていた。

※本編ブラック・ブレットとは展開がかなり違っています。というか、全く違います。
↑ここ重要！

※その新入社員は、私の小説、「プラマイ！」より前山です。ここでも、下の名前は公表しません。

※小説は1・3巻（アニメは全部見ましたが）だけしか読んでいませんので、キャラ

崩壊があるかもしれません。

※前山のイニシエーターはオリキャラです。

目次

日常 vol. 1

1時間遅れの出社 | 1

頼り頼られる信頼 | 8

First work! | 14

絶望への歩み | 20

蛭子影胤テロ事件

民警狩りの始まり | 27

Reason to do | 34

Secret in my hear | 42

t | 42

負の時代に生きる者 | 50

guerilla fight

56

光はまだ見えない

明日を繋げたいから

63

68

日常 vol. 1

1時間遅れの出社

2021年 4月28日

「そ、そんな……」

食い殺されていく、友達も、先生も、近所の人たちも。そして、家族も。

「前ちゃん！早く！」

「やだ！守ることができなかった！だから、僕も………！」

「私たちがいくらベストを尽くしたって、守りきれなかった。全員を守り抜くことなんてできなかつた。そうでしょ!？」

「……………くっ！」

とりあえず、自衛隊の輸送機に駆け込んだ。青村の叱咤もあったが、なにより、目の前の現実から逃れたかった。だから、逃げた。

これが、僕が全てのガストレアを倒す原動力になっている。だけど、それでこの10年、僕は感情を失った。だけど、あの人が僕にまた感情をくれた。強さと共に………

※

10年後 2031年

「天童民間警備会社は……」

かなり冷静だが、実を言うところ時間遅刻している。だって焦ったってすぐ辿りつけるわけじゃないじゃん。え？早く着く？うるせえなコノヤロー。

僕は、前山（まえやま）。22歳。一応、今日から民警だ。これでも、ある能力を持つてる。それがどういうものかは知らないけど。

「……か？」

とりあえず、それらしいところには着いたが……え？闇金とかゲイバーがあるんだけど。とてもじゃないけど一般人は入りづらいんだけど。あ、でも民間警備会社はあった。

「…………………入るか」

もしかしたら、人生最期はガストレアじゃなくて、闇金かもしれないかもしれないなコレ。

※

ガチャ「おはようございます」

「ああ！やつと来た！」

な、なんだ？ドア開けて挨拶したらなかなかの美女が。しかも……………

「デカイ……」

「え？」

「あ、いや………それより、ここは天童民間警備会社でよろしいでしょうか」

「もちろん、ここよ。私、社長の天童 木更。確か、まえ………」

「前山です」

「そうそう！今日からよろしくね！」

「はい！こちらこそ！」

良かった。思っていたよりもかなりいい人そうだ。ただ、やっぱり巨乳に目が行ってしまふ。言ってしまった瞬間に斬られるじゃないんかと思っただけ。

「ところで社長」

「あつ、木更つて呼んで。里見くんは同い年だけど、前山くんは私より年上でしょ？だから、名前くらいは………」

「そうですか………木更さん」

「フフツ………何かしら？」

恥じらわずにいつてみたつもりだが、すっげえ恥ずかしい。社長とか年下とか関係なく、相手が女性だから。

「里見さんは、どいこ？」

「里見くんだったら、多分もうすぐ来ると思うわよ?」

「そうですか……………」

東京エリアに来て、まず里見さんに会おうと思っていたが、留守ならば仕方ない。

「ねえ前山くん」

「はい」

「仙台エリアにいたときはどうしてたの?」

何の脈絡も無い質問だった。まあ、里見さんもシャイボーイって感じだから、木更さんに僕のことほとんど喋ってないのだろう。気になるのも分かる。

「僕は、小学校の頃の幼馴染と2人暮らしをしてたんです。青村 綾音っていうヤツと」

「あら女の人? いい関係じゃない」

「え? あ、いや、誤解しないでくださいよ!」

「フフツ」

出社十数分にして主導権握られてるんですけど……………ちなみに言つとくと、断じてそういう関係ではない。ただ一緒に果たしたいことがあっただけ…………

「おはよう木更さん」

「あ、里見くん」

どうでもいいことを考えていると、里見さんは帰ってきた。ここに来る途中、同じよ

うな服を着た人を見た。あのときはわからなかったが、里見さん、学生みたいだ。

「お久しぶりです里見さん！」

「久しぶりだな、前山」

里見 蓮太郎。天童民間警備会社に所属するプロモーター。今分かったが、どうやら学生さんのようだ。

「あ、前山」

「何ですか？」

「一応、薄給だから覚悟しとけよ？」

「えっ」

里見さんの薄ら笑いの変態っぽさも驚いたが、少給はもつと驚いた。だって……

「民警って儲かるんじゃないんですか？下世話な話するようですけど」

「大手はな。でも、ここみたいなぼつと出の民警はほとんど儲からない。木更さんを見てみる、スーパールのチラシかぶりついてる。俺も、酷い目見た……」

「はあ……」

「どうやら、生活水準の低下は覚悟しといたほうが良さそうだ。でも、チラシにかぶりつくことがないようにしよう。あと酷い目って何だろう？」

「木更さん！」

「な、なによ里見くん……………」

「前山に、言うことがあるんだろ」

「ああ」

「？」

そう言うのと、木更さんは机から紙を取り出した。おそろく、アレだろう。

「はいこれ」

「民警許可証受領書ですか」

「そう、許可証をもらってやっとな晴れて民警だから、確実に受け取ってきてね」

「はい」

「それと、許可証もらったら、I I S Oでも手続きをしてくてね」

「分かりました」

I I S O。国際イニシエーター監督機構というらしい。ここで、序列の管理やプロモーター、イニシエーターの選定を行っているらしい。許可証をもらい、I I S Oで手続きを踏まない、プロモーターとしての仕事はできないという。

とりあえず、僕の民警生活は始まった。特に、面白いこともヤバイことも無いが、まあ普通に始まるに越したことはないだろう。とにかく、早くイニシエーターに会ってみたいな。なんでも……………

らしいから。

ロリ

頼り頼られる信頼

「お待たせしました」

女性は、10歳ぐらいの子供を引き連れてそう言った。

「こちらが、あなたのイニシエーター、佐々木 夏来（ささき なつき）です。今後は、あなたとイニシエーター、2人1組で活動していただきます」

「分かりました」

僕のようなプロモーターは、イニシエーターの監督、指導を行うのが通例らしい。まあ、それに従って活動しているペアは少ないようだけど。

「あと、前山・佐々木ペアのIP序列は4万6700位からスタートです。序列が昇格した場合にはIISOから連絡するのでそのつもりで」

「はい」

4万6700位か………確か、里見さんのペアが12万ちよいくらいだったから、一応格上か。

でも、実際はあんな強いのに、何で12万位なのだろう。

「では、私はこれで」

そう言い残して、担当の女性は去っていった。というか、夏来ちゃんが俯いたまま微動だにしないんですけど。

「夏来、ちゃん？」

「……………どうせ」

「え？」

「どうせまた、見捨てるんでしょ」

驚いた。子供がこんなにも鋭い眼差しになるなんて。他にも、驚くところはたくさんあった。だけど、それは特に驚いた。自分もそういうときがあつたからかな。だけど、さっきの発言への返事は一つ。

「僕は絶対に見捨てず、最後まで君を信じ抜く。この言葉は嘘偽りの無い本心だ」

なんだか、またあの頃、感情を失った頃に戻りそうになつたけど、僕はこの子の前で嘘をつけそうにない。というか、つけない。

「そう口で言つては、何度も裏切られた。私は「僕だつて同じだよ」

「え？」

「僕だつて、いろんな人に裏切られ、感情を失くしたときだつてあつた。今だつて、人を信用することが怖い。でも、僕を少しでも信じてくれる人は僕も信じてることができる。」

君は、どうだ。僕のこと、1mmも信用できない？」

「……………」

夏来ちゃんのように、ガストレア抑制因子持つてウイルスの宿主となつた子供たちは、『呪われた子供たち』と呼ばれ、超人的な能力を持った代償に、世間からは憎悪の対象として見られている。酷い暴行を受けたり、住む場所を制限され、暴言を吐かれるなど酷い扱いを受けるといふ。やつと誰かに愛されたと思つても、何かに利用されるに終わり、結果見捨てられる。そりや、人を信じられないのも無理は無いな。だけど、超人的な能力以外は、ちゃんと心を持った、温かみのある普通の人間だと僕や里見さん、木更さんの3人は思っている。

「ねえ」

「なんだい？」

「もし、私を最後まで信じるとのなら、頬に、キスして」

「え？」

え、今なんつった？どこぞのハーレム野郎じゃないけど、キスしろ？いやいや！社会的にマズイわ！余裕でできるけど、いろいろマズイわ！

「できないの？」

「できるけど……………いいのか？こんな野郎が君の頬になんて……………」

「言ったからにはN.Oなんて言えないよ。それに、キスをして、信じるという意思表示をしてくれるなら、私はアンタに骨を埋めるつもりで一緒に戦う」

「わ、わかったよ」

まだ、誰もいないからいいが、もっと人が多いところでだったら僕は確実に死んでただろう。

そして、僕は唇を頬に近づけ……………

んちゅ……………

あーやつちまつただあー……（棒）ロリにキスしちまつたああー……。誰も見てないよな？誰も見てないよな？う、うわあああああああ！

「僕はそういうヤツじゃないそういうヤツじゃないそういうヤツじゃない……………」

「大丈夫？」

「え？あ、ああ…大丈夫だ。それより、これで、信じてくれるん、だな？」

「うん。本気だつてことがわかったからもちろん！よろしく！」

やつとこの子の満面の笑みを拝むことができた。ちゃんと心を開いてくれるか心配だったが、どうやら取り越し苦労だったようだ。

「よろしく！夏来ちゃん！」

ここに、前山・佐々木ペアが誕生したのであった。

「どっかで飯食おっか！」

「うんうん！」

フリーザ フリーザ フリーザ フリーザア！

「お、電話か」

「何その着信音」

「ええ？まあ、Fだよ」

テンションダダ下がりなのと着信音がFなのはどうでもいい。木更さんから電話がかかってきた。

「もしもし木更さん？」

『前山くん!?今どこにいる?』

「僕は、イニシエーターと合流してまだ管理事務所ですけど」

『そう………だったら、今すぐに近くの商店街に向かって』

「もしかして、ガストレアですか」

『そうよ。今すぐ行って、報酬を貰ってきてちょうだい』

里見さんから聞いたが、この人、金のためだったら獣になるという。そして、仕事を逃すとケツを叩かれるらしい。それはそれでいい気も………って、僕は何言ってるんだ

！

『許可証も武装も。そして、イニシエーターもいる。もう、戦えるわよ!』
「そうですね」

『なら、速く行ってきました。仕事を取り逃がすなあー!』

「わ、わかりました。すぐ行きます」

見えない気迫に押されて、そそくさと切った。何にせよ、これが初仕事になりそうだ。
「どうしたの?」

「初仕事、だ。行こう!」

「……………うん!」

僕たちの戦いが始まるうとしていた。

First Work!

「これは……………」

かなり多くの野次馬がいた。野次馬を掻き分けながら、商店街のアーケードの入り口までたどり着いた。その先には、モデルスパイダーだろうか。ガストレアがいる。

「あなたが、担当の刑事ですか」

「そうですが。あなたはどちらさまですか」

「こういう者です」

そう言うと、僕は刑事に許可証を差し出した。刑事は吟味するようにじっくり許可証を見つめる。

「あなた、今日許可証交付されたばかりじゃない」

「それが、何って言うんですか。他に民警はいないんでしょう?」

「まあ……………」

刑事は、なにかもの言いたげに自己紹介始めた。

「私は、担当の木崎 美羽（きさき みわ）。警視庁の捜査一課所属です。そちらは?」

「僕は、前山っていう。天童民間………」と、こっちにガストレアが向かってきたぞ」

「どうやら、ガストレアは私たちに自己紹介する暇もくれないみたいね」

そう言つて、木崎刑事は仮説のバリケードの扉を開け、僕をアーケード内に入れた。密閉されているためか、少し鼻をつくような臭いがする。

「ところで、あなたのイニシエーターは？」

「ああ、それだつたらもうあの子いるべき場所に配置しましたよ」

「あなた！許可を出す前に………」

「説教だつたら後だ。今はバリケードを閉じて、しかと見ててくれ」

バタンと扉が閉まると同時に、銃声が鳴り響く。

イニシエーター、もとい呪われた子供たちというのはそれぞれ特性があり、その特性とは、動物や昆虫の生態を受け継いだものだ。夏来ちゃんはモデルホーク。その名のとおり、鷹の特性を受け継いだものだ。動体視力を生かした狙撃、射撃。これが主な攻撃だ。今の銃声も、アンチマテリアライフル、つまり対戦車用ライフルの銃撃によるものだ。この時点でもスゴイ威力だが、弾はガストレアが嫌うバラニウムによつて、さらに増している。僕から見た感じでは、夏来ちゃんの銃撃はクリーンヒットしたようだ。ガストレアも轟音のような叫び声を上げている。

「前！あとは決めて」

「もちろん！」

もがいているガストレアめがけ走る。鞘から刀を取り出し……………

「はあああああああああああ！」

トドメの一撃。刀もバラニウムでできているため、コイツも効き目抜群だ。叫び声を上げたかと思えば、体がバラバラになった。相手が相手とはいえ、いろいろ罪悪感が湧き上がってくる。

「夏来ちゃん、終わったぞ」

「うん……………」

「だいじょーぶー？」

木崎刑事が、トロンとした声でこつちに駆け寄ってくる。よく見ると、結構若いな。

「連携がすごかったわねえ」

「一応、これでもさつき合流したばっかだけどね」

「そ、そう……………あ、これ、報酬ね」

「ありがとうございます」

スゲー変なお礼をした。しかも、ハモつちまった。orz……………とにかく、これで木更さんにケツを叩かれずに済みそうだ。

「じゃあ、形式的ではあるが……………」

「ええ」

「2031年、4月28日1645。前山・佐々木ペア。ガストレアを排除した」

「ご苦労様でした」

真面目な視線を交わしていたが、言い終わった後に思わず笑ってしまった。

「前々」

「なんだ？」

「ご飯行こうよ」

「ああ、もともと遅かったのにさらに遅くなっちゃったな。行くか！」

「行く！行く！」

僕と夏来ちゃん、食欲のままに走り出した。肉食いてえ。

「……………あ、多田島さん？こっち終わりました」

『おうそうか。どこの民警が来たんだ』

「ええと、天童民間警備会社ってとこですね」

『ほんとか！こつちも、その会社が来やがった』

「ええ。でもこつちのペアはさつき合流したみたいですよ。その割には連携がかなり取れ

てましたけど」

『そうなのか。しかし、こつちのペアはバカなもんだ。報酬受け取るの忘れてやがるぜ』

「急いでたんじやないんですか？ちゃんと渡してあげてくださいよ？」

『なあに。今回は初回無料キャンペーンでやったんだろうよ。フハハハハ！』

「多田島さん、底意地悪いですね」

『なにい？……………まあいいか。それより、お前はとうすんだ』

「とりあえず、一度家に戻って、また本部に戻ります」

『そうか、なるべく早く戻れよ』

「りよーかいです」

※

「ただいま戻りました……………た？」

「里見くんのお馬鹿！」

「お、おわったことはしやーないだろ！」

「前、ここつていつもこんな感じなの？」

「いや、僕も今日来たばつだから分かんない」

「帰社したら、男女の戦場を見てしまった。木更さんがすごい剣幕だが、一体何があつたのだろうか。」

「木更さん、何があつたんですか？」

「里見くんが！報酬を受け取り忘れたの！最後のチャンスだったのに！」

「そ、そうですかい」

何が最後のチャンスなのかは知らないが、相当頭に来ていられるらしい。さつきから執務机に当たっている。

「悪かったから机に当たるな。怪我するぞ」

「じゃあ里見くんが腹を切つて誠意を見せてよ！」

「あの一？」

「何！」

「一応、報酬もらつてきたんですが一？」

「ホント!? やつぱり年の功つてすごいわねえ」

「いやまだ22なんです」

確かに実年齢より上に見られるけどそんな歳いつてねえから! 年の功出されるほど歳いつてねえから!

「ねえ! なんで新人の前山くんが報酬取つてきて、なんで里見くんは報酬取つてこれなかつたのよ!」

「んなこと言われても知らねえよ!」

木更さんと里見さんの言い合いは見てて飽きないが、いろいろクドイな。

絶望への歩み

「そういえば木更さん」

「ん？何かしら前山くん？」

「イニシエーターを連れてきましたけど……その子供を狙う犯罪者みたいな顔で寄ってくるのやめてくれませんかねえ？」

ヤバイ。この人ガチモンのロリコンだ！というか、女のロリコンとか需要ねえわ！あるのかわからないのかわかんねえけど需要ねえわ！

「そんな目で近寄るの、やめてください」

「し、辛辣ね……ちよつと前山くん！なんでこんな風に教育したのよ！

「いやそんなこと言われても……」

別にそんな風に教育する時間は無いし、教育できるとしてもそういう風には教育し
まい。

「あ、イニシエーターといええ。里見さんのイニシエーターはどうしたんですか？」

「ああ、延珠だったら疲れて家に帰った」

「そうですか……」

「行くか？俺ん家。一応、アイツもここの社員だから、顔合わせする必要があると思うんだが」

「まあ、そうですね」

今更な感じもするが、なんで年下に対して謙っているのだろう。いやね、里見さんは僕を救ってくれたと言っても過言じゃないからね。謙つてもいいかなって思ったんだよ？

「ど、どうしたんだよ苦惱して」

「……………いや、何でもない。気にしないでくれ。じゃあ、夏来ちゃん、行くか」

「うん」

「ちよつと！私を置いてくつもり!?!」

「だって、全員行ったら会社誰もいなくなるだろ」

「里見くん、半年間の給料50%カット。いいわね?」

「なんで?!」

木更さん。アンタかなり鬼畜&理不尽やな。でも、これに関しては木更さんの八つ当たりだから同情はできない。

「里見さん、金だつたら少しは貸せますよ？貯金崩せば」

「え？あ、いや。それはだな……………」

「そうなのカー。よろしく頼むぞー♪」

「よ、よろしく」「よろしく♪」

何を頼まれるのかよく分からないが、延珠ちゃんは笑顔が眩しい……………愛でたい。と思つたら夏来ちゃんもここに来て最高の笑顔を見せた。今更だけど、かわええ……………

「どうした前山。そんな恍惚とした表情して」

「あ、いや……………」

「悪いな。晩飯作らして」

「大丈夫つすよ。飯を作るなんて昔からやつてることですから」

「でも妾は蓮太郎のうまいご飯が食べたいぞ〜」

「前のご飯のほうがいいもーん♪」

いやいや、アンタ、まだ僕の飯食ったことねえだろ。というか、なんで飯について本人じゃないヤツが張り合ってるんでしょうね〜。

「温め合おう♪」

「うん♪」

!?!……………何か、唐突に抱き合い始めたんですけど!?!確かに出会った瞬間から気持

ち悪いほど仲良くなったみたいだけど、流石にそういう関係になるのは嫌だわ!

「おい幼女2人組!人目をはばからずにとんでもねえことするんじゃないやねえ!」

「お?蓮太郎も一緒にしたいのか?なら、3Pしよう?」

「3Pなんてどこで覚えたんだよ!グーオールか?!あれだけグーオールとは関わるなって言っただのによお!」

「前も一緒に、しよ?」

「上目遣いで訴えるな——!……もう、飯は作り終わったので、帰ります—」

「おい待て!お前がいなくなったたら收拾がつかなくなるだろ!」

神様、どうかこのカオスをお救いくださいませ……

※

「ここが私の住処か」

「住処って……」

住処って、動物かよ。まあ、それはどうでもいいのだが。とりあえず、昨日引越しが完了した新居に帰ってきた。さっき作った飯も、里見さんや延珠ちゃんにも好評だったから、すごく気分がいい。

「さて、飯は食ったし。あとは風呂入って、抑制剤打って、寝るだけだな」

「……………ねえ、前」

「ん、どうした？」

「私のこと、夏来って呼んで？」

「え？」

唐突すぎて聞き返してしまった。夏来と呼べ、難しいことじゃないが、1つ引つかかることがあった。

「いいけど、いいのか？そんな馴れ馴れしく……………」

「うん。なんだか、前となら一緒に死ねる気がするから」

「そ、そうか……………」

一緒に死ねるって何か怖いけど、心開けたってことで肯定的に捉えたほうがいいのかな。

「それより夏来、風呂入ってこい」

「えー一緒に入ろうよー♪」

「え……………ま、いいか」

「やったあ♪」

こんなかわいいい声発しながらとんでもないこと言いやがって。それより、僕の理性、もつかなあ……………

今日の1日はとても幸せな時間が流れた。ガストレアとも戦ったけど。こんなかわいい子と戦うなんて、夢にも思ってた。だけど、蛭子影胤テロ事件の始まりが明日だなんて、僕や夏来はもちろん、まだ誰も知らなかった……………

蛭子影胤テロ事件 民警狩りの始まり

「起きろー夏来ー」

「ううん……………」

コイツ、朝がめつき弱いらしい。もう4度目だというのにまだ布団から出る気配がない。

「オイ！いい加減起きろー！」

「へ？」

このアホっぽい顔、にくたらしいけど可愛いと思ってしまう自分がいる。あつ、ポトポト歩き出した。

※

「おはようございます……………って、僕らだけか」

一応、あの2人は高校生だから、この時間は登校して授業を受けている時間だろう。ちなみに夏来も一緒に来ているが、コイツはまだ編入手続きを済ませていないだけで、

学校に行かないというわけではない。あと1週間くらいしたらいくことになるだろう。だから……………」

「夏来！勉強だ！」

「ええ……………勉強やだよ……………」

「あと1週間したら学校行くんだ。みんなと差がかなりあつたら、恥ずかしいだろ？」

「うう……………」

この子、勉強は好きじゃないみたいだな。しつかり教えてやらなければ。あ、ちなみに僕の頭と指導技能は問題無いぜ！一応、大学卒業して、小学校と中学校の社会の教員免許を取得したぜ！

「金属は熱すると体積はどうなるか分かるか？」

「増える」

「そう！分かんじゃん！」

コイツ、のめり込みは相当良いのだが反復して覚えようとしな。というか、1回やったらもう覚えてしまう天才肌らしい。反復して覚えてこの頭脳を得た叩き上げにとつては羨ましい。しかし、このやり方はある教科で苦勞する。

「じゃあ夏来、今度は算数だ。問題は……………」

問、正方形AとBがあります。Aの面積はBの面積の1.2倍で6.6?です。Bの面積は何?でしょうか。

「ええ〜?.....どう?」

「違うな」

「ええ〜?」

夏来は、ただの計算問題だったら完璧なもの、こういった文章問題のようは応用利かせないとならない問題は絶望的だ。算数や数学は、公式や解き方だけ覚えても、それをしっかり応用できるかが鍵となる。応用力をつけるにはやはり、数をこなすのが一番だろう。そうすれば自然と応用力が身につく.....つて、僕は何真面目に学習解説してんだ。でも、数をこなすという努力をしてこなかった僕だから言えることだ。小学生や中学生のみんな、覚えておくといいいぜ.....

「前ーまだ終わんないのー?」

「あと少しな」

まあ、コイツに関しては意欲が無いだけでできない子っていうわけじゃないから、教えるのには手がかからない。

※

「そろそろ飯行くか」

「うん！」

勉強したり、いろいろ遊んでいたたりしたら一時になろうとしていた。途中何故か木更さんが来たが、そそくさと出て行ってしまった。一体何だろうか。夏来は勉強疲れからか、かなりぐったりしている。飯行くって聞いたたらテンション上がったが。

とか思っていたら、見知らぬ人物が会社の扉を開けた。

「ここに、前山という人物はいるか」

「ええ。というか私ですが……………」

「そうか。なら、消えてもらおう」

「!!」

趣味の悪い仮面をつけたスーツ姿の男はそう言うと、拳銃をこちらに向けた。

「伏せろ夏来！」

荒い声でそう叫んだ直後に、男は射撃。僕も間一髪のところまで左に避けた。そして、能力解放。一気に相手の足元まで駆け寄る。

「灯台下暗し。あっち逝つてもこれ、忘れんなよ」

捨て台詞、決まったな。男の腹部に、僕の全力の一撃が決まった。そうすると、男はうろたえ、倒れた。

「夏来、もういいぞ」

「ねえ、今のは?」

「さあ。ただ、僕らを殺しに来てたのは確かだが」

夏来が不思議そうにこの男が誰なのかを尋ねるが、僕にも分からない。まあ、この趣味悪い仮面をつけてる時点でまともじゃないのだが。

「仮面、取ってみる?」

「……………いや、やめとこう」

「どうして?」

「まあ、なんとなくな」

どういうつもりで仮面をつけてるのは分からないが、何となく気絶してるヤツの仮面を取り外したくない。本当に根拠は無いのだが。

「そうだ夏来。机の引き出しからアレ持ってきてくれ」

「うん」

夏来は引き出しから手錠を取り出し、こっちに投げた。なぜ持っているのかはスルーで。そして、それを男にかけ、ひと段落。

「あとは、上司への報告かな。あ、夏来、カーテン閉めてくれ」

「どうして?」

「もしかしたら狙撃されてるかもしれないからだ」

さつきは直接こっちに來たが、三手先を読んで狙撃手を用意しているかもしれない。そう思った結果の指示だ。と、電話電話。

「……………あ、木更さん？」

『あ、前山くん。ちょうど良かったわ』

「え？」

『いやさつきね、里見くんと私防衛省に行ってきたんだけど』

「防衛省？どうしてまた」

『まあ、それは後で話すけど、そこに蛭子影胤っていう燕尾服に気持ち悪い仮面つけた男が……………』

「ちよつと待つてください！今、画像送ります」

『え？』

まさか、気持ち悪い仮面って……………

「すみません、いきなり電話切って」

『すみませんじゃないわよ！これって……………』

「どうやら、そのようですね」

防衛省に現れたヤツも、こっちに現れたヤツも、同じ志を持った人間らしい。

「前！テレビで……………」

「なんだ……………こ、これって……………」

テレビのニュース映像を見ると、そこには「民警狩り？同時多発的に民間警備会社襲撃」とあった。そして、テロップには仮面をつけた・・・ともあった。もしや

……………

「木更さん」

『どうしたの？』

「その事件、僕たちが思っている以上に複雑なようです」

『え？』

「防衛省の事件、こちらの事件、各地の事件。すべて繋がってるみたいです」

『こちら？各地？どういうこと？』

「それも含めて、今から説明しますよ」

根拠は無い。だが、この事件、何か大きな力が働いている。そう、何故だか思う。

Reason to do

「と、いうことです」

『なるほどね……………』

僕は、木更さんに会社であったこと、東京エリア各地の事件のことや襲撃者は揃って趣味の悪い仮面をつけていたこと。そして、襲撃者は全員同じ志を持った人間で、トッブは防衛省を襲撃した人間、蛭子影胤だと考えられることも話した。でも……………

「志が分からない……………」

『それだったら……………』

「分かるんですか!？」

『私たちが、防衛省で聖天子様から直々に受けた依頼にも繋がるんだけどね』

「聖天子? どうしてまた」

聖天子といえ、日本の五つのエリア、東京、札幌、仙台、大阪、福岡の東京エリアの統治者だ。政治手腕は、少なくとも仙台的ヤツよりも上。蛇足を付け加えるなら、かなりの美人だ。

『なんでも、この間里見くんが倒したガストレアの感染源ガストレアを倒し、ジュラルミンケースを回収しろっていう依頼なんだけどね』

「へえ。でもそのケースの中身って、何ですか?」

『聖天子様が言うには、七星の遺産が入ってるんですって』

「七星の遺産?それって……………」

『なんでも、それを使うとステージ5にガストレアを呼び寄せるらしいの』

「ステージ5?!……………」

ステージ5のガストレアというのは、通常発生し得ない個体だ。だが、それがガストレア大戦で猛威をふるい、世界を滅ぼした存在だ。過去2回出現した際には、序列1位と2位のペアが倒したという。もし、東京エリアに出現したら、太刀打ちできるのだろうか。だが……………」

「なぜ、そこまでステージ5をそこまでして出現させようとするんでしょうか?出現したら自分にも危険が及ぶだろうに……………」

「いや、影胤はもともとプロモーターで、娘とペアを組んでみたいんだけど、そのときの最高序列が134位みたいなの」

「それは高いこと……………」けど、それでもステージ5を倒すなんて無理がありませんか?」

「まあ、そうね……………それに、結果的に志がどういふことかも分からないしね」
「ええ……………」

どうしてステージ5を出現させるのにどうして民警を襲うんだ？ 民警の戦力を薄くして、自分だけで戦うのか？ でも、勝つ見込みなんて薄いのに？……………なんか、頭痛くなってきた。

『前山くん大丈夫？』

「……………ええ」

『ならいいけど。あ、今全民警は自衛体制を取るようにつて命令が出るから、気をつけて』

「わかりました」

『あ、でも董先生に食料を持ってつてあげてくれない？ お金だったら里見蓮太郎宛で領収書貰つておいてくれればいいから』

「はあ……………」

別に、室戸先生に食料を持っていくのは嫌というわけじゃない。むしろ、一度会つてみたかったから。でも、領収書発行させてまで里見さんに払わせようとするなんて……………

『じゃあお願いね。私は里見くんの治療が終わったら戻るから』

「了解です」

少々長電話になってしまったが、今起こっている………いや、起こりかけている事件について推察し合うことができた。まあ、最後ののアレは要らなかつたと思うが。とりあえず、気を抜いてはいられない。

「ねえ、終わった？」

「ん？ああ、もう終わった。じゃあ、飯食いに行くか。で、その後お使い頼まれたからそれも行けど」

※

「四賢人って、そんなすごいのか？」

「僕もよく知らんが、里見さんが言うには面倒臭いけどすごい、らしいぞ」

「ふーん」

室戸董、世界最高の頭脳、四賢人の1人だ。バラニウムを発見・研究したのは彼女で、筋金入りの変人らしいが、かなりの切れ者らしい。でも、なぜそのような人とあの里見さんが知り合いなのか理解できない。

「失礼します」

「………ねえ、本当にここ？おばけ屋敷みたいなんだけど………」

「うん……一応、室戸ラボとはあるからここだと思うけど………」

ラボの扉開けてみたけど、初見難易度高すぎるわ！アイツのラボもなかなかヤバかったけど、こっちはもつとヤバいわ！一歩足を踏み入れたら帰ってこられない気がするわ！入るけど。

「室戸先生？」

「やあ」

「うわっ！」

「ぎやああああああああああああ!!」

※

「ハツハツハツハツ！いやあ悪かったねえ」

「……………」

この人、一応謝ってるようだが、全然反省の色が見えない。里見さんの言っていた筋金入りの変人というのは、間違いではないようだ。趣味の悪い研究室、変人サイエンティスト。もう、こりや……………

「ところで夏来ちゃん」

「……………なんででしょうか」

「となりの前山くんに変なことはされてないかね？」

「変なことって……………」

「君、ゲイか……だから当てはまらなかったわけか」
「違いますから！」

チクシヨウ……ゲイ呼ばわりされた。これ以上の屈辱はない、と思う我。

「もう、帰ります。夏来、行くぞ」

「ああ前山くん」

「何ですか」

「人というのは、リスクが多くても利益があれば利益を得ようとする。これだけ覚えといてくれ」

「え？」

利益があれば利益を得ようとする？ どういうことだ？ 意味を問い質そうとしたのだが、仕事を始めたので問い質すのはやめた。

※

「……………」

「どうしたの？」

「ん？ いや……………」

さつき、室戸先生の言っていたことが全くわからない。いや、おそらく影胤一派が今回の事件を起こした理由のことだろう。でもさらに言うのなら、なぜその理由について

考えているのが分かったのだろうか。……………まあ、そんなことはどうでもいいか。

「君が、前山くんだね」

いろんなことを考えていると、背後から声をかけられた。声質的に、30代男性とあったところだろうか。だが、反射的に手を出したくなる。そんな殺気をアイツは出している。

「夏来、今すぐに右の植え込みに飛び込め」

「……………うん」

夏来は植え込み、僕は側溝の上に飛び込んだ。とてもカッコいいものとは言えないが。しかし、背後からは銃弾が2発飛んできた。結果オーライだな。

「姿、現わしやがったな」

「そうだとも」

僕の眼前には、今一番の敵がいた。

S e c r e t i n m y h e a r t

「姿、現わしやがったな」

「そうだとも」

蛭子影胤・小比奈ペア。親子であり元序列134位のペアが僕の眼前にいる。影胤は、例の趣味の悪い仮面を付け、燕尾服を身に纏っている。小比奈のほうは、黒いドレスを身に纏い、小太刀だろうか短めの剣を2本携えている。

「やはり、里見くと違って君には大人の落ち着きがある。里見くんは私を見るなり、殴りかかってきた。まあ、悪い気分ではなかったがね」

「首謀者は、お前か」

「なんのことかね？」

「とぼけんな。各地の民警を襲っているヤツらはみんなお前が付けている仮面を付けているんだよ」

「なるほど。確かに、首謀者というのはこの私だ。しかし、各地の民警が襲われているというのは初耳だな」

「なにい？」

民警狩りをさせているのは影胤ではないという。嘘ついているだけかもしれないが、何となく嘘をついているように思えない。根拠は無いが。

「ねえ、あなた名前なんて言うの？」

「……………夏来、佐々木夏来」

「へえ！パパ、夏来を斬っていいかな？」

「小比奈、まだ斬ってはいけない」

「……………」

アイツ、何言ってるんだ？確かに、この2人まともなヤツらとは思っていないが、まさか名前聞くなり斬りたいって言うとは思ってなかったわ。夏来も拳銃構えて完全に守りに入ってる。

「ああそうだ。その君の言う民警を襲っているヤツというのは、多分、アイツだ。嵩幸！」

影胤は、嵩幸という人名を叫んだが、どこからとも現れる様子はない。しかし、なぜか夏来が険しい表情をする。

「どうした、夏来」

「……………!!」

夏来が回れ右をしたかと思えば、いきなり、発砲した。僕も、夏来が見ている方向に

目をやると、とてつもない速度でこっちに向かってきている男が1人。ソイツは、やはり例の仮面をつけている。

「避けるぞー！」

再び、道路の脇に飛び込んだ。さつきも飛び込んだために少し体が痛い。そして、起き上がった先には紺色のスーツを着ている男がいた。

「紹介しよう。コイツが、我が弟、豊中 嵩幸（とよなか たかゆき）だ。話したがいらないヤツでね」

「弟、だと？」

影胤に弟がいるなんて聞いていなかった。おそらく、政府も知らなかったとは思うが。だが、敵が増えた、これだけは言える。この場で嵩幸ぐらいは行動不能にしつをいたほうがいいだろうか。

「おっと前山くん。私たちには手を出さないほうがいい。弟は、私よりも実力が上だ」
「……………ああそう」

薄々感じてはいた。弟の方が実力が上。さつき飛び込んできやがったときにな。

「ああもう一つ、言うことがある」

「……………なんだよ」

「君の会社に、スペシャルなプレゼントを送っておいた。気をつけたほうがいいよ」

「は？どういうことだよ……………」

質問していた頃には3人一斉にどこかへ飛んでいった。スペシャルなプレゼント、気をつけたほうがいい？……………まさか、な。

「前、スマホ鳴ってるよ」

「あーはいはい」

「こんなとき、でもないが誰だ電話かけてきやがるのは。あ、木更さんか。」

「もしもし」

「ねえ前山くん今どこ？」

「え？今会社に戻るところですけど」

「そう。じゃあ、今すぐ病院に来て」

「え？どうして……………」

「実はさつきね……………」

※

「木更さん！」「木更！」

「ああ前山くん。夏来ちゃんも来たのね」

「木更さん、里見さんと延珠ちゃんが爆破に巻き込まれたって……………」

「ええ。今治療が終わったんだけど、予断を許さない状況みたい」

木更さんは、平静を保っているつもりのようなのだが、声が震え、目から光が無くなっていて動揺しているのは一目瞭然である。

「にしてみ、誰が……………」

「木更さん、その犯人なんです……………」

もう、犯人だったら分かっている。僕や里見さん、そして、全民警の敵だ。

「そうなの……………」

「厭に冷静ですな木更さん」

「ここで怒り散らしたって意味ないでしょ。それに、蛭子影胤とその弟を倒す理由が、また一つ増えたわ」

「そうですか……………え？木更さんは例の作戦に参加しないはずじゃ」

「ああそれだったらね、民警狩りで戦闘に参加できるペアが少なくなってるから、今は人員が少しでも欲しいってことで私も参加することになったの。あなたたちにも、声がかかると思うわよ」

まさか、木更さんが作戦参加するとは思わなかった。僕らに声がかかるのはどうでもいいが、木更さんの参加はかなりの戦力アップに繋がるだろう。里見さんによれば、木更さんは天童式抜刀術の免許皆伝だそう。実力は相当なもの、腎臓の持病で長時間は戦えないらしいが。

「ところで、事務所のほうは？」

「事務所だったら、大丈夫よ。入り口の損傷は激しいけど、中のほうはほとんど無事よ」
「ああなら良かった」

事務所にいろいろ貴重品とかもあったから、里見さんたちを心配している隅でその辺のことを心配している自分もいた。

「あら、いつの間にメール……………あ、早速呼びがかかったわよ」
「もうですか……………」

「ほおら、さっさと行く！」

木更さんはさつと背後に移動して僕の背中を押す。

「分かりましたよ。夏来、行く……………ぞ？」

夏来は、集中治療室の里見さんや延珠ちゃんをじつと見ていた。暗い表情で。

「夏来、どうした」

「ん？なんでもないよ？」

「嘘つけ、何か心苦しいことでもあるのか？」

「え？？何でもないよ？あ、今から何かするの？」

「え？うん、まあな」

「じゃあじゃあ、それしようよ！」

はぐらかされてしまったが、人の嘘、隠し事を見つけてるのは得意な方だ。今はとりあえず放置しておくが、今あることが終わったら必ず暴いてやる。

※

「聖天子様、お連れ致しました」

「ご苦勞様」

執事らしき人物が僕を聖天子執務室に連れてきた。部屋の内装は至つてシンプルだった。そして、ソファに座らせられた。ちなみに夏来は別の場所で待機している。

「前山さん、まず結論から言います。あなたたち前山・佐々木ペアを里見・藍原ペアに代わり、蛭子影胤及びブステージ4ガストレア討伐主要戦闘員に任じます」

「えーと、それはどういふ……」

「先程、あなたの上司を補助戦闘員に任じました。補助戦闘員は、主要戦闘員のバックアップが主な任務です。そして、主要戦闘員は討伐作戦の最前線での戦闘が任務です。今回、蛭子影胤の襲撃で里見さんはじめ多くの主要戦闘員が戦闘不能になったため、あなたを戦主要戦闘員に任じた、ということですよ」

聖天子様の言葉をまとめるならば、この作戦では主に主要戦闘員が戦うけど、影胤の襲撃で主要戦闘員が戦闘不能になったから、僕と夏来は里見さんと延珠ちゃんの代わりに主要戦闘員に任じられた、というわけだ。でも、僕の頭の中で引っかかるのが

.....

「お言葉ではありませんが、僕の戦闘力で務まるでしょうか。それに、代わりは前任の所属から必ず選ばないといけないというわけではないのですよね？」

「仰る通り、所属から選ぶという縛りはありません。ですが、戦闘力に関してはあなたが飛び抜けて上でした。といつても、里見さんとは同等ですが」

「と、仰りますと」

「前山さん、あなた1ヶ月前に仙台エリアで里見さんと交戦したそうですね」

「えっ、どうしてそれを……まあ、お恥ずかしい理由で、ではありませんが」

「それは後で話しますが、そのときあなたたちは引き分けに終わったそうですね。互いに戦闘力は同等なので当たり前ですが。しかし、あなたたちはまだ本気では無かったそうですね」

「え？……まあ、確かに私のほうはそうですが、里見さんですか？」

「ええ。……この際ですし、里見さんの能力について、説明しておきましょう」

里見さんの能力、天童式戦闘術という武術と射撃くらいだと思っていた。だが、まだあるという。なぜ、夏来といい里見さんといい、何かを隠すのだろうか。まあ、秘密や隠したい事というのはあまり口外することではないのだろうか。

負の時代に生きる者

※

「前山さん、あなたはバラニウムをどのようにして武器として使っていますか」

「え？………一応、剣として使っていますが、どうしてこのようなことを？」

「すみません、話が逸れましたね。本題に入りますが、約10年前、人類はガストレアに対抗するためバラニウムを見つけ出しました。そして、それを発見したのは四賢人の一人、室戸董医師。ここまではいいですか」

「ええ」

聖天子様はバラニウムについて話し始めた。それは全て僕でも知っていることではあったが。

「そして、ほぼ時を同じくして里見さんがガストレアによって左目、右足右手を失いました」

「え!?でも、里見さん、義手とか義足とかいう感じじゃなかったですし、左目だってちゃんとあるようでしたが………」

「では前山さん、バラニウムを用いた機械化兵士計画、新人類創造計画はご存知ですか」

「え？ いや……………」

「まあ、ご存知でなくて当然です。新人類創造計画、身体を部分的に機械化し、超人的な攻撃力や防御力を持った兵士を作り出す計画です。その計画の責任者は室戸董医師」

「えっ」

さつきから『え』ばつか言っているが、まさかここで董先生が出てくるとは……………
というか、これはもしかしたら里見さんと董先生が繋がったかもしれない。

「もしかして、里見さんは室戸医師の手術を受け、機械化兵士にはなったものの、強さを手に入れ、失った部位を取り戻し今に至るということでしょうか」

「はい、そうです。里見さんは序列上は12万位ですが、元134位の影胤ペアも十分に渡り合える力があると思います。他のペアでは倒せなくても、里見さんだったら倒せると考えています。もっとも、こちらも蛭子影胤の情報はそれほど多く持ち合わせていませんので影胤が想定外の力を持ち合わせていなければの話ですが」

「そうですか」

政府、いや、聖天子様にとって里見さんは希望の光のようだ。134位と対等に渡り合える、いろいろゾクゾクするものがある。だが、ひとつ問題があるのはだれでも分かるだろう。

「ですが、里見さんは今生死の境を彷徨っているところです。里見さんのことから、

死ぬなんてことはないとは思いますがしばらく危篤を脱さなかったら、どのようにするおつもりで」

「ですから、里見ペアの代わりに、あなたたちを起用したんですよ」

「はあ……………」

「さつきも申した通り、あなたたちの戦闘力は同等です。それに、双方にはまだ伸びしろがある。里見さんに蛭子影胤を倒すほどの力があるなら、あなたにも倒すことが可能ではありませんか」

「まあ、それはそうなのかもしれませんが……………」

「前山さん、もはや東京エリアで蛭子影胤を倒せるのはあなたと里見さんしかいないんです。さらに、里見さんは満身創痍の状態です。そうなれば前山さん、あなたが死ぬ気で動かなければ東京エリアも確実に、死んでしまいます!」

聖天子様は少し怒り気味で僕に言葉をかけた。僕は、最初から最初から聖天子様への返事は決めている。けど、僕に務まるのか……………いや、考えるほど無駄だな。

「聖天子様、僕の答えは最初から一つですよ。私なんかでよろしいのなら、里見さんたちの後任、喜んで引き受けさせて頂きます!」

「……………ありがとうございます。尽力、期待しています」

「はい」

聖天子様は、少しホツとしたような感じだった。断るつもりなんてさらさら無かったが。

「では、次は佐々木さん連れられてきてください。彼女とも話したいことがあります」

「……………分かりました」

バン!!

「……………何?」

「聖天子様、動かないように」

部屋の外で銃声が轟いた。銃声が聞こえた方向には、夏来の待機している部屋がある。……………もしかしたら、かもしれない。腰から拳銃を取り出し、廊下に出る。

「何度も言いますが、聖天子様は動かないようお願いします」

「……………気を付けて」

「もちろんです」

拳銃を構え、歩き出す。すると、やはり夏来のいる部屋から硝煙のような匂いがする。

「動くな……………ん?」

「あ、前」

部屋の中には警備員らしき人物がいた。死んではいないようだが、白目をむいてぐったりしている。おそらく夏来が返り討ちをしたのだろう。

「オイ、この警備員はどうした」

「え？なんか撃ってきたから返り討ちにしちゃった☆」

「いやいやしちゃった☆じゃねえよ。というか、お前にケガはあるのか？」

「んー。腕に当たったけど、すぐに閉じちゃった」

「そ、そうか」

おそらく警備員の持っていた拳銃の弾はバラニウムではなかったのだろう。とりあえず、夏来が無事で良かったが。

※

「前山さん」

「あ、木崎刑事。夏来の聴取はまだ……………」

「すみません。事件の当事者なので聞かなければならないことが山ほどあるんです」

「そうですか。まあ気にせずやってください」

夏来が撃たれかけた事件で警察署に聴取にやってきた。もう小一時間ほど待っているが終わる気配はない。そして、気付いたら夜が明けていた。

「ところで、その警備員の動機は……………」

「ええ、お察しの通り、です。加害者は筋金入りの呪われた子供たち差別主義者。夏来ちゃんを殺したくてたまらなかつた。だそうです」

「……………そう、ですか」

許せない。仙台にいたときも、こういう状況を幾度となく見てきた。どうして、子供たちを攻撃するのだろうか。確かに、ガストレアが憎いのは分かる。僕だってそうだが、いつ何時も子供たちを憎み攻撃しようなんて考えたことはない。なぜ、子供たちを攻撃したからって自分たちの負の感情は消えないことが分かっているのに、どうして

……………

「前山さん、わたしはこれで」

「……………わかりました」

しかし、僕はそう思っていて、そう思わない人は少なくない。いくら分からせようとしても分かってももらえない。僕たちのすることは、ムダなのだろうか。いくら願っても、ダメなのだろうか……………

g u e r r i l l a f i g h t

「前、どうしたの？」

「ん？いや、なんでも……………」

警察の聴取をやつと終え、家路に着くことができた。本来なら聖天子様に夏来を合わせる予定だったのだが、例の事件で聖天子サイドが混乱しているためまた後日になった。

「それで夏来、ホントにケガ無いんだな？」

「もー心配し過ぎだつてえ。私はそんなヤワじゃないよ」

「そうか、ならいいんだけどな……………」

夏来にケガが無いくらい、最初から分かっている。だけど、夏来に何か聞かないと、尋ねないと僕の心が落ち着かない。こんなこと言うべきじゃないと思うが、近い将来に夏来を失ってしまいそうな気がするのだ。

「ねえ、朝ご飯なあに？」

「え？そうだなあ……………」

失ってしまいそうなんて、根拠は無い。だけど、こんなことが続いていると思うと……いや、考え過ぎだろうか。

毎日毎日僕は鉄板の上で焼かれて 嫌になっちゃうよ

「前、携帯鳴ってる。というか、こんどのそれは何？」

「まあ、気にするな」

着メロが泳げたいやきくんなのはどういいが……このくだり、いつだかやった気がする。それこそどうでもいいが、聖天子様から電話がかかってきた。例の依頼の件だろうか。だったらわざわざ直接聖天子様がかけてくることじゃないと思うが、何だろうか。

「もしもし」

『前山さんですか。今すぐに警視庁に来てください』

「どうして、でしょうか」

『単刀直入に言うと、ステージ4ガストレアが姿を現しました』

「……………え？」

ステージ4ガストレア、今回の討伐対象だ。いつ出てもおかしくないため、準備指示は出ていたものの、まさかこんな早く出現するとは。だが……………

「了解しました。すぐ向かいます」

もう、戦う覚悟は腹括って決めている。いつでも来いや!!

「え?どこに向かうの?」

「そんなの後だあ!」

「うわあ!!」

※

「間も無く着きます!」

「分かりました!」

「どうして私が……………」

「まあ夏来、そんな落ち込むんじゃないよ。説明してないのは悪かったが、まあ、うん」
「語彙力の欠如が半端じゃないぞ前さん」

僕の語彙力欠如はどうでもいいが、とりあえず今は三十二区を目指している。何でも、そこにステージ4ガストレア、もとい感染源ガストレアがいるらしい。それにしても、なぜこんなにも遠い三十二区に?と思う。感染源ガストレアは空を飛ぶという一言で片付けられたが、感染源ガストレアはモデルスパイダー、空を飛ぶはずがないのだが。

『前山くん聞こえる?』

「木更さん?どうしました?」

『どうしたじゃないわよ。あなたたち、装備は?』

「あ……………」

『やっぱりね。そうかと思って、あなたたちの足元にクソ女からの餞別置いといたから、使って』

「木更さん……………」

そのクソ女が誰なのかは分かっている。僕はそうは思わないが、木更さんは異常なまでにその人に敵意を抱いているという。それはそうと、餞別って……………」

「おお」

『さつきからシンクロしてて癩に触るわね……………で、多分2つ武器が入ってと思うけど、1つは夏来ちゃん用に特別にカスタムしたアンチマテリアルライフルですって』

「何これメツチャ使いやすい」

『そう、なら良かったわ。それともう1つ、日本刀。超バラニウム使ってるみたいだから、とにかくすごいらしいわよ』

「はあ」

超バラニウムのすごさはよく分かっただけ。例の機械化兵士計画でも使われてるらしい。硬度が高いらしいが、それに比例していい値段するらしい。

『前山くん』

「は……」

『ちゃんと、倒してよね』

「もちろんですよ」

『でも、それ以上に、私を一人にしないで……………』

「木更さん……………大丈夫、言われずともあなたを一人にはさせませんよ。だから、安心してくださいな」

「……………ありがとう。じゃあ、わたしはあなたたちがマズくなったら救援に向かうから、身が危なくなったらすぐに救援信号を出して」

「ええ。でも、木更さんに出番が無いように、頑張りますよ」

※

「アイツだな……………」

「大きいね」

「まあな。じゃあ、夏来、お前はここから狙撃頼むな。パイロット、よろしく」

「おうよ！」

ノリのいいパイロットなようだ。因みに語彙力欠如の指摘をしたのもあのパイロットだ。

「じゃあ、降下する」

「気をつけて」

タラップを開き、ヘリから飛び出る。自分の体がどどん落ちていくのが分かる。そして着地。金具を取り外し、ガストレア目掛けて走る。そこから能力解放。僕は、能力解放すると、戦闘力によって目の色が変わる。今は、水色の目だ。

「!!」

鞘から刀を取り出し、ガストレアを斬り裂く。轟音にも似た叫び声を上げる。ガストレアからは体液が飛び散るが、一步後ろに引き、避ける。そして、上空からのアシスト。

「……………」

さすが狙撃手といったところだろうか。冷静にガストレアを撃ち抜いている。まあ、狙撃手に冷静さが無いのも困るが。そして最後に刀の一撃、銃弾一発がガストレアに決まり、KO。

「……………」ふう。おい夏来、聞こえるか？終わったぞ」

『うん！案外シヨボかったね！』

「ああ……………」

終わった。その嬉しさなどもあるが、いつも夏来と狙撃しているときの夏来とのギャップに萌えていた。それよりも、ジユラルミンケースを回収しなければ。

「ええと、これかな」

嵐というのは、本当に突然やってくるものだ。

「やあ前山くん、また会ったね」

忘れたいが、絶対に頭から離れないこの声。そう、アイツだ。

光はまだ見えない

※

「やあ前山くん、また会ったね」

「……………」

僕の眼前には、蛭子影胤と小比奈がいた。やはり変わらない。いかなる状況であろうと癩に触る仮面を付けていやがる。

「よくのうのうと姿を見せられたもんだな影胤さん」

「ハハハ、僕が何をしたというんだね。私は自分自身の存在意義を証明したいだけなんだよ」

「……………存在意義だか何だか知らんが、癩に触るんだよ、言動といい顔といい」

「ほう、そんなことを言われるとは心外だな。それより、そのジユラルミンケース、こちらに渡してもらおうか」

「生憎、はいどうぞと言つて渡せるような代物じゃない。今すぐ回れ右をして帰つてくれることを願いたいな」

「なるほど。しかしこちらもはい分かりましたと言って引き下がるほど簡単じゃないくらい分かっているだろう?」

「ま、そうだな」

納得してしまった自分が憎たらしい。確かに、影胤が簡単に引き下がるほどポンコツな野郎だとは思っていない。

「ねえパパ。アイツ、斬っていい?」

「ダメだ。まだ天に送るときじゃない」

なにが天に送るときじゃないだ。脳筋野郎と思われるかもしれないが、今すぐ影胤を完膚なきまでに叩きのめしてやりたい。

「いや、気が変わった。今君の拍動を止めよう」

腰の刀を鞘から抜き出そうとしたが、反応速度が影胤の発砲に間に合わなかった。しかし、かなりの至近距離にも関わらず腕に被弾した。

「そんな怖い顔しないでくれよ」

「……………どういうつもり、だ」

「後ろを、見たまえ」

後ろを向く。しかし、振り向いた瞬間に腹部のあたりになにか刺さるのを感じた。この感じ、サバイバルナイフだろうか。

「お前もかよ……………」

「……………」

「なんか、喋ったら、どうだ」

ナイフが腹から抜けて行く。サバイバルナイフってこんな痛かったっけ？そんなことを思っていると影胤が

「私たちは、必ず行動に移せる。君のしたことは、無に帰った」

と、意味の分からないことを言った。無に帰った？どういう、ことだ？それより、意識が、とお、のいて……………」

※

「前ちゃん！」

「……………」

「どこだ、ここは。」

「しっかりしてよ！」

ああ、これはあの時かあ。そこまで遠くないでも、記憶から無くなりかけていたあれか。

バチン!!

「何でなの……………」

この先は確か……………

「前山くん？起きた？」

「……………木更さん、ですか？」

さっきのは、夢だったのか。記憶から無くなりかけていて、この先は思い出せない。いや、嫌な思い出だから、記憶から消えたのだろうか。……………まあ、どうでもいいか。

「僕は、あれからどうなったんですか？」

「うん。あの後、ここに運び込まれて緊急オペをしたの。それで、1日近く寝てたわ。オペのとき、かなり危ない状態だったけど、なんとか、持ちこたえてくれた。頑張ったわね」

「そう、ですかね」

「そう、社長にとつて、社員が行きて帰ってくるのが、何より嬉しいことなの」

この安堵した顔、アイツと重なる。何度も見てきたから。どれだけ、アイツを心配さしてきたのかよく分かる。

「ところで、夏来は？」

「夏来ちゃんだったたら、隣のベッド眠ってるわ。君が目覚めますのをずっと待ってたけど、眠くなっちゃったみたい。あ、特に怪我は無いみたいよ」

「そうですか」

安らかに、すうすうと夏来は眠っている。やはり、こうして見るとかわいいな。寝顔はいつも見ているが、今のこの状況下で見ると、より愛おしく感じる。この寝顔が無くなってしまわないか、そんな心配に駆られてしまう。

「あ、話変わりますけど、やっぱジュラルミンケースは………」

「ああそのことなんだけどね。ケース、奪われてなかったの。けど………」

「けど?」

「中身、何も無かったの」

その瞬間、影胤の言葉の意味が理解できた。どうやら、まんまと騙されたみたいだ。僕たち。

明日を繋げたいから

※

「中身、何も無かったの」

木更さんから放たれた言葉は、影胤のあの言葉が無ければ落ち着いてはいられなかったが、あの言葉があつて今木更さんが言ったことは冷静に受け取ることができた。

「木更さん。僕、またやらかしたみたいです」

「やらかした? どういうこと?」

「影胤に撃たれて、意識が無くなりかけそうなときに『私たちは必ず行動を起こせる。君のしたことは無駄だ』って影胤が言ったんですよ。つまり、ダミーを掴ませられたってことですよ。今思えば……………チクシヨウ」

あの自分の置かれていた状況を考えてれば、あのとき影胤を止め、ジユラルミンケースを取り返すのは容易では無かった。だけど、もっと早くダミーであることに気付き、何か手を打てなかったのか。それを考えると……………悔しい。

「ねえ、前山くん」

「はーっ」

「どうして、そんなに悔しがってるの？」

「え……………」

答えが分かりきっている質問。木更は今、それをした。なぜそんなことをした？彼女の中の感情が、僕に働きかけたからだ。

「君が今するのは、何？決まってるじゃない。崩壊へのカウントダウンを止めて、ここに、東京エリアに明日を繋げることじゃないの？違う？」

「木更さん……………」

「君は、対象を回収できなかったけど、崩壊へのカウントダウンはゼロになったわけじゃない。チャンスは、ごく僅かだけである。それを、ただただ悔しがって無駄にしないで。お願い、私たちに、明日を繋げて……………」

明日を繋げる、か。……………まだ、できていないことが、たくさんある。したいことが、たくさんある。僕だって、この地に明日を繋げたい。僅かなチャンスを無駄にしようとしたけど、今は絶対にそんなことはしたくない。だったら、今からすることは一つじゃないか。

「木更さん。今すぐへり出せますか」

「前山くん……………ええ、今すぐに！」

そう言う土木更さんは足速に病室を去っていった。隣のベッドでは夏来がぐつすり

と眠っている。

「夏来……………」

まだ腕に痛みが残る。気を失ったのは銃撃によるものではなく、それによる貧血だ。全く情けない。昔からの相棒貧血くんが腕を撃たれて顔を出すなんて。でも、今はそんなこと嘆いていられない。

「起きたら、決戦だ」

明日を繋げたい。この思いを胸に抱いて、戦う。

※

「里見さん。行ってきます」

里見さんは依然沈黙を破らない。延珠ちゃんも同様にだ。どちらも峠は越えたようだが、油断はできないと言う。

「前山くん、準備できた？」

「僕はまあ。夏来がまだ着替え中ですがね。って、その装備は？」

「決まってるじゃない。私の装備よ？一緒に戦うんだから」

「ああまあそうですよね……………え？」

木更さんが持っているのは日本刀。これを持っていること自体そこまで驚くことじゃない。一緒に戦う？マジかよ。

「木更さん、あなたが強いのは前々から知ってるし、戦うのは結構ですが、木更さんにもしものことがあるれば僕は守りきれぬ自信がないし、里見さんや董先生にも申し訳ないんですよ。だから、木更さんはここに……」

「私の身体が弱いのは自分がよく知ってるし、何かあっても自分でどうにかするから、君は余計な心配しないでいいの」

木更さん自体、根の強い人間だからこんなもんで止まらないのは分かっていた。もつと言つてやろうかとも思ったが、心が折れて、

「しようがないですね」

と言つてしまった。後悔してらうん。

※

聖天子サイドによれば、影胤たちは昨日からほとんど動きがないという。未踏査領域はどんなことがあるか分からない。影胤たちもなかなか歩みを進められないのだろう。こつちにとつては好都合だが。

「ねえ前」

「なんだ夏来」

「どうしてこの女がいるの?」

なんか、目の前の佐々木夏来という人物が気に入らない同級生を悪く言うような口調

で木更さんを蔑んでいるんですが。

「この女呼ばわりはねえだろ。したくなるのは分かるが」

「前山くん、夏来ちゃん。給料60%カットね」

「なぜ!?!」

給料60%カットってキツすぎるだろ!某都知事だって50%カットだろ!というか、全部自分が撒いた種だろうが!

「さあ、もうすぐ着くわね」

そして、この切り替えの速さである。さっきの軽蔑の目は何だったんだホント……あ、因みに木更さんはいつもの制服じゃないんだぜ。特に意味は無いぜ、多分。

※

「ねえ、こんなところに蛭子影胤はいるの?不気味過ぎるんだけど」

「むしろこんなところにはいないわけが無いでしょう。何を言ってるんですか」

「やっぱり、給料60%カットね」

もはや自分にとつて不都合なことをあやふやにするときには給料カットを出せばどうにかなると思っているらしい。まあ、不気味なのは同感だが。

10分前、未踏査領域に到着。行くアテもなく彷徨っていた。影胤が未踏査領域にいるというのは分かっているのだが、具体的にどこにいるかは全く分かっていない。

「前！あれ！」

「どうした？……あれは、焚き火か？」

「もしかして……」

「嫌な当たりクジ、引いたのかもしれない、ですね」

到着10分程で排除対象を見つけて運いいのか悪いのかわかんねえなこれ。なにせよ、注意して行かなければ。

「じゃあ、木更さんはここで護衛お願いします。夏来、行くぞ」

忍び足で焚き火が焚かれているほうに向かう。どうやら、半壊したコンクリートの住居の中で焚き火を焚いているようだ。そして、人のいる気配もある。

「夏来、裏から行け」

「おっけ」

夏来を裏に回らせ、突入の準備を固める。中の人物がこちらに気付いている様子は無い。突入するなら、今だ！

「動くな!!……ん？」

僕の眼前には、冷たい表情をした少女がいた。